

12:16 ダビデはその子のために神に願い求めた。ダビデは断食をして引きこもり、一晩中、地に伏していた。

12:17 彼の家の長老たちは彼のそばに立って、彼を地から起こそうとしたが、ダビデは起きようとせず、彼らと一緒に食事をとろうともしなかった。

12:18 七日目にその子は死んだ。ダビデの家来たちは、その子が死んだことをダビデに告げるのを恐れた。彼らは、「聞きなさい。王はあの子が生きているとき、われわれが話しても、言うことを聞いてくださらなかった。どうして、あの子どもが死んだことを王に言えるだろうか。王は何か悪いことをされるかもしれない」と言ったのである。

12:19 ダビデは、家来たちが小声で話し合っているのを見て、子が死んだことを悟った。ダビデは家来たちに言った。「あの子は死んだのか。」彼らは言った。「亡くなられました。」

12:20 ダビデは地から起き上がり、からだを洗って身に油を塗り、衣を替えて【主】の家に入り、礼拝をした。そして自分の家に帰り、食事の用意をさせて食事をとった。

12:21 家来たちは彼に言った。「あなたのなさったこのことは、いったいどういうことですか。お子様が生きておられるときは断食をして泣かれたのに、お子様が亡くされると、起き上がり食事をされるとは。」

12:22 ダビデは言った。「あの子がまだ生きておられるときに私が断食をして泣いたのは、もしかすると【主】が私をあわれんでくださり、あの子が生きるかもしれない、と思ったから

だ。

12:23 しかし今、あの子は死んでしまった。私はなぜ、断食をしなければならないのか。あの子をもう一度、呼び戻せるだろうか。私があの子のところに行くことはあっても、あの子は私のところに戻っては来ない。」

12:24 ダビデは妻バテ・シェバを慰め、彼女のところに入り、彼女と寝た。彼女は男の子を産み、彼はその名をソロモンと名づけた。【主】は彼を愛されたので、

12:25 預言者ナタンを遣わし、【主】のために、その名をエディデヤと名づけさせた。

12:26 さて、ヨアブはアンモン人のラバと戦い、この王の町を攻め取った。

12:27 ヨアブはダビデに使者を遣わして言った。「私はラバと戦って、水の町を攻め取りました。」

12:28 今、兵の残りの者たちを集めて、この町に対して陣を敷き、あなたがこれを攻め取ってください。私がこの町を取り、この町に私の名がつけられるといけませんから。」

12:29 ダビデはすべての兵を集めてラバに進んで行き、これと戦って攻め取った。

12:30 彼は、彼らの王の冠をその頭から奪い取った。その重さは金一タラントで、宝石がはめ込まれていた。その冠はダビデの頭に置かれた。彼は、その町から非常に多くの分捕り物を持ち去った。

12:31 彼はその町にいた人々を連れ出して、石のこぎりや、鉄のつるはし、鉄の斧を使う仕事に就かせ、また、連れ行て、れんが作りの仕事をさせた。ダビデはアンモン人のすべての町に対して、いつもこのようにしていた。ダビデとすべての兵はエル

サレムに帰った。

バテ・シェバとの姦通によって生まれた子どもが死の病となり、ダビデは「断食をして泣いた」ように、その痛みが相当であったことがわかります。彼は罪の報いを受けなければならないことを覚悟していましたから、主のみこころに委ねたのでしょう。そして最後は、主のみこころに委ねて悲しみから立ち上がりました。

この後ダビデは罪によって、その子どもたちから多くの苦難を受けることになり、彼らもまた反逆のゆえに死にます。ダビデの罪によって子どもたちが死ぬのも納得がいかない気はしますが、しかし滅びを招いたのは彼ら自身の罪でもあります。全能の主は人間の罪や弱さをも用いて、そのみわざをなされる方です。

バテ・シェバとの間の子どもが死ぬのも釈然としませんが、そこには人間に知ることのできない主のご判断があったのだと思われます。ただ、ダビデは「私はあの子のところにいく」と言っていますから、永遠の命の希望は失われていません。

この世には生まれてすぐに召される子どももありますが、そこにも人の考えの及ばない深い主のお考えがあることです。イエス様は永遠の命のために十字架に架されましたが、それは地上に生きた時間にはよらないのです。

ダビデは断食しながら、以上のように様々なことを主に訴え、悔い改め、また教えられたでしょう。たとえ自分の罪が原因であっても、主はその人が回復できるように、希望を与えてくださる方です。

- ①神のみこころは？ ②どんな思いになりましたか？ ③生き方にどう適用しますか？ ④この世にあって何を実践しますか？